

拒絶理由通知対応AIの進化：2025年から2026年への質的転換

知財実務におけるAI活用が、単なる「下書き支援」から「自律エージェントと人間との高度な協働」へと進化

2025年（黎明期）

下書き支援から「自律エージェント」へ



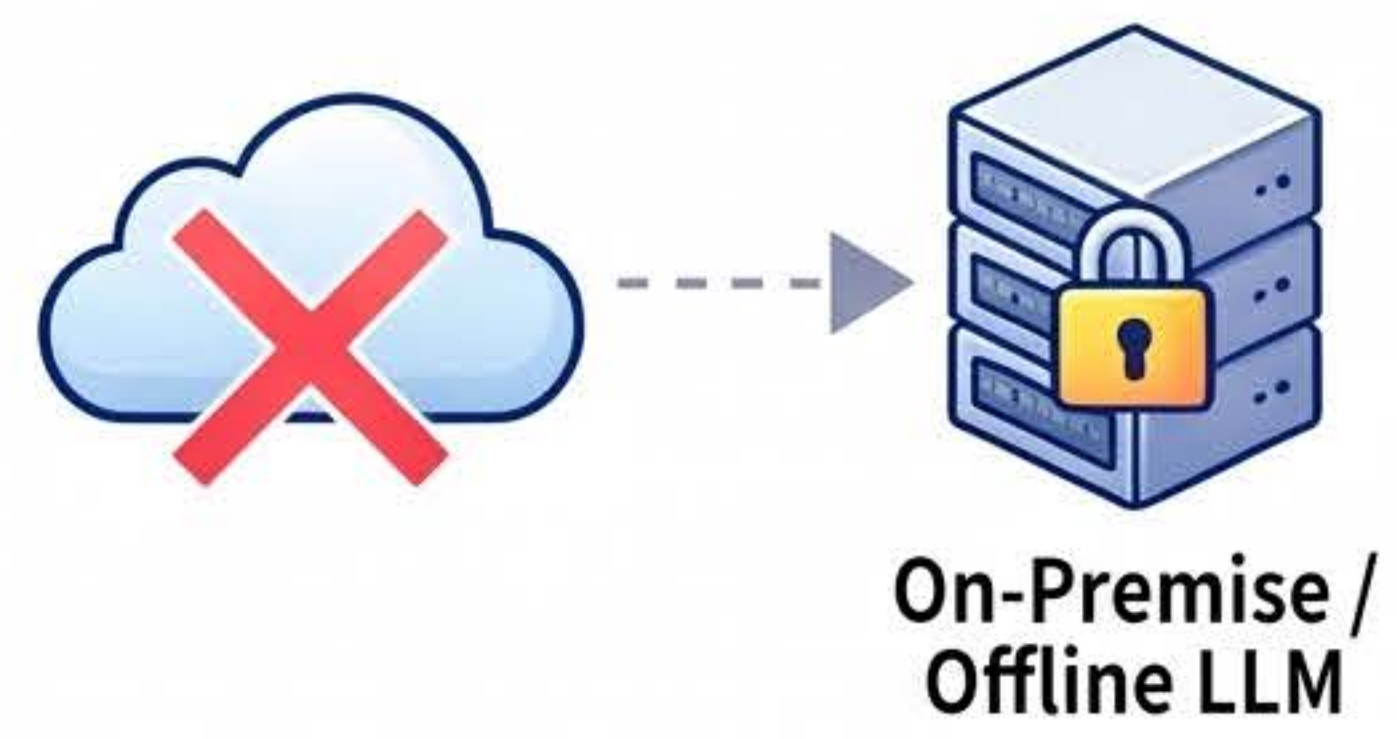
2025年の手動PDFアップロードから、2026年にはMCP連携による特許DBの直接操作へ進化

推論コストを45分の1に圧縮



特許特化型アルゴリズムにより、長大な公報テキストを構造化し、高速かつ低コストな処理を実現

セキュリティ設計の「閉域化」



補正案などの最高機密を守るため、クラウド依存からオンプレミス・オフラインLLMへ需要がシフト

	2025年（第34回フェア）	2026年（第33回フェア）
主要技術	汎用LLM + 基礎的RAG	自律エージェント（MCP実装）
対比対象	国内特許公報のテキスト中心	非特許文献（学術論文・仕様書）
論理再現	指摘段落の抽出・要約	審査官の思考ロジックのアルゴリズム化

2026年（自律・統合期）

「人×AI」ハイブリッド実務モデル



AIによる「一次解析」の自動化

- ✓ 引用文献の要約
- ✓ 構成要件対比表の作成
- ✓ 補正根拠箇所の網羅的抽出



弁理士による「法的論理」の構築

- ✓ 審査官の認定誤りの精査
- ✓ 進歩性反論のロジック構築
- ✓ 最終的な権利化戦略を人間が決定

専門家に求められる「新スキル」



単なる精読作業



AIへの「観点設計力」



出力の「法的妥当性の評価力」